

戀女房染分手綱

三

三吉愁の段

〔解題〕 寶曆元年二月一日から竹本座上演。作者は吉田冠子・三好松洛。吉田冠子は人形遣の名手吉田文三郎の作者名である。近松の「丹波與作待夜の小室節」(近松名作集上巻参照)の改作。原作の世話物をお家物式に仕立て直して趣向をこらし筋を複雑にしてある。即ち丹波の一城主由留木家の奥家老伊達與三兵衛の子物頭の與作は、若殿右馬之助が都の藝子いろはを身請の爲の三百兩を鴛塚官太夫に盗まれた越度と、腰元重の井との密通が顯れたのとの爲に追放となり、重の井の父能師竹村定之進も亦殿に道成寺の鐘入の傳授をして鐘の中で切腹して子の罪を負つた。與作は馬方となり、藝子いろはの成れの果なる關の小萬と馴染んで居る間に、盗ま

れた金の調達の爲に苦心して、我が子と知らずに自然生の三吉に盜をさせる。なほこの間に色々の波瀾があるが、とゞ親子夫婦はめぐり逢ひ、（こゝはほど原作の筋を守つてゐる）興作は與之助と共に官太夫を討つて本知に復し、重の井小萬と共に調の姫のお供をして江戸に下るといふ筋。第一東山の段、第二涼みの段、第三興作勘當の段、第四重の井訴訟の段、第五道成寺の段、第六孝行の段、第七恩愛の段（坂の下の座頭慶政殺し）、第八道行、第九親里の段、第十道中双六、重の井子別れの段、第十一旅籠屋の段、第十二歸參の段、第十三敵討の段に分れて居る。

こゝに收めたのはその十段目の切である。近松の原作とはゞ同文であるが、只重の井の詰りの條に少し相違を見るのは、全體の筋立の異なるが爲の當然の結果である。

地 お傍の衆にはやさされて稚心の姫君。 お供し入りにけり。地 馬方はつひに見 御意なさるゝ。お上にも御機嫌。是はかう面白い東とは今迄おれは知らなんぬ金の間をうそゝと。覗き廻れど庭御前のお菓子有難う戴きや。お錢三筋だ。サアゝ行かうはや往かう。詞 ヤの外踏みも習はぬ備後表。詞 エ、この買ひたい物買やゝ。殊にそちが通しぢアござらうとおつしやるか。地 そりや座敷は。ぎやうに滑つて歩かれぬ。大やげな道中すがらも用あらば。お乳の日出度いはゝ。又もや御意の變らぬ間に。名の家よりも。地 こつちの内が。結構人の重の井に逢はうといや。見れば見に。行列揃へと立騒ぐお乳の人は勇みでござると。フシ獨言して居たりけり。程よい子ぢやに馬方させる親の身はをなし。そんならま一度大殿様お袋様に盛入れ。地 お乳の人は大高に。お菓子様々文匣よくゝであらうと。フシいと懇の詞とお盃。これも馬子殿お蔭ぢや出かいに盛入れ。詞 どれゝ三吉そこにか。の末。地 三吉つくゝ聞きすまし。詞 たゞそちには禮いふ褒美やる。そこそちは健者ぢや。地 道中双六お目にか。山留木殿の御内。お乳の人の重の井様に待ちややとさゞめき渡り。フシ奥にけそれ故に姫君様。お江戸へござるとはとお前か。地 そんなりやおれが母様

と抱き付けば。調ア、こは慮外な。お所の衆が養うて。やう／＼馬を追ひ習ひ。沈みて居たりしが。地いや／＼我が

のれが母様とは。馬子の子は持たぬ。

地ともぎ放せばむしやぶり付き。引退する。コレ守り袋を見やしやんせ何の

母は心の汚い者と。蔑しまるゝも情な

くれば縋り付き。調何のない事申しませう。外に望みは何にもない。父様を尋

い。譯を語つて合點させ恥しめて歸さ

せう。わしが親は。お前の昔の連合ひ。ね出し一日なりとも三人一所に居て下

來い與之助。地と引寄せ兩手を取り。

この御家中にて番頭伊達の興作。そのされ。見事杵も打ちます。この草鞋

調扱も大きうなりやつたの。とても成

子は私。こな様の腹から出た。與之助もわしが作つた。蠶馬を追つて夜は杵

人せうならば。侍らしうなぜ尋常にも

はわしぢやわいの。地父様は殿様のお打ち草鞋作り。父様母様養ひませう。

育たぬぞ。顔の道具手足まで。カ、リ母は

氣に違うて。國をお出なされたは小さい時で覚えねど。杵掛の乳母が咄には。

斯うは産付けぬ。美しい黒髪をこの様

調母様も離別とやらで。殿様に御奉公。母様と。スエチ取付き抱き付き泣き居た

に刺りさげて。手足は山のこけ猿ぢや。

こなたを乳母が養育し。父様に逢はせり。地お乳ははつと氣も亂れ見れば見

ほんに氏より育ちぞと。フシ又さめさ

たう思へども甲斐もない。母様の細工の程我が子の與之助。守り袋も覚えあ

めと泣きけるが。調コレ物をよう合點

の守り袋を證據に。山留木殿のお乳のけども。アツア大事の御奉公養ひ君の

今では子でも母でもない。地淺ましう

人。重の井様と尋ねよ。地と懇に教へお名の瑕。偽つて叱らうか。イヤ可愛

成りさがつたを嫌うて言ふではさら

て乳母はおれが五つの年。久しう痠をげにさうもなるまい。マアちよつと抱

／＼ない。爰の譯をよう聞きや。調母

煩うて。鳥羽の祭の餅が咽に詰つたやきたい。ア、どうせうと。百千色の憂

は元御前様の御奉公人。興作殿は奥家

子の一平は。父様を尋ねに行き。地なき涙。二つの目には保ち兼ね

フシむせ老の御子息。互に若木の戀風に。地指

れつ縫れつ一夜が二夜とたび重なり。そなたを懐胎この事お上へ聞えては。父も母も御成敗に逢ふ故に。調病氣と偽り。乳母が所で産落し。育て貰ふ其内に。情なや八平次といふ者の仕業にて。父様は御追放。この母が愴氣から。不義の事顯はれ。既に御成敗に極まりしを。わしが爲には父様。そなたの爲には。祖父様の定之進様。勿體ない。わしに代つての御切腹。お姫様の乳離れといひ立て殿様のお慈悲にて。姫君のお乳の人首尾さへよければ。そなたも今。奥家老の御子息。二番と下座に下らぬ人。其時母も一所にのけば尤も夫婦の道は立てども。身に餘つたお家の御恩。誰がいつの世に報ぜん残つて御恩を報じてくれと。父様のこゝとわり故第一は男の爲。夫婦の義理を忠義に代へて。飽かぬ離別を。フシし

たわいの。調男の子は稚うても。御勘あるなどと。どう妨げにならうやら蟻氣の末氣遣ひな。地與作が子とばし言の穴から堤も崩れる。軽いやうでも重やんなや。調サア早う御門へ出や。い事ひそ／＼いうて人も聞く。サア先ア、いかなる因果な生れ性。現在我が子に馬追ひさせ男の行方も知らぬ身が。母は衣裳を着替つて。お乳の人よし。お局よと。玉の輿に乗つたとて。是が何になる事と。フシ聲を。忍びに泣くばかり。地子は生れ付き賢くて聞分けある程猶泣入り。悲しい話を聞きましたり。さりながら。常に乳母が申したは。姫君様と私とは乳兄弟の事なれば。母様にさへ逢うたらば父様も出世なさる。由。御訴訟なされて下されかしと言へばちやつと口を押さへア、勿體ない。調その乳兄弟はいはぬ事。姫君様は。調ちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風雪降り夜道には。腹が痛いと作病おとまり故第一は男の爲。夫婦の義理を忠義に代へて。飽かぬ離別を。フシし

間體。地三吉といふ馬追ひが乳兄弟に

疹の用心しや。可愛の形やいたくし金貰ふ筈がない。地エ、胴慾な母様覺君のお伽に最前の馬方をこの乗物に引や。千三百石の代取が何の罰ぞ咎めぞえて居さしやれと。わつと泣出すその付け。お慰みに唄はしや。畏つたと幸と。式臺の壇箱にフシ身を投げ。伏し有様。母は魂消え入つて。養ひ君お家領ども。詞コリヤそこな自然生め。地て歎きしが。地懷中の有合ふ一步十三の御恩思はずは扱て。一人子を手放し唄ひ居らうとぎごつなく。詞ヤアこい袷紗に包み。これ嗜みに持つて居やと。て何のやらうぞ。奉公の身の淺ましやつは吠えをるか。地何ちやこりやいま涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めとフシ悶え。こがれて歎きける。地時くしいと。握拳を二つ三つ。戴きなしげに。詞母でも子でもないならば。に奥口ざゞめいて早や御立ちと姫君がら泣聲に。唄坂は照るく。鈴鹿は病まうと死なうといらぬお構ひ。そのの。御興かき上げ行列立て。お乳の人くもる。土山間の。間の土山。雨が降一步も入らぬ。馬方こそすれ。伊達の乗物をひら付けにこそフシかき寄せる。ナホス降る雨よりも親子の涙中に。與作が惣領ちや。母様でもない他人に。けれ。地お乳はさあらぬ顔付して。姫しぐるゝ雨やどり。